

平成27年4月15日 第48号

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付録
すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



「さま」東京から電車で二時間ほど離れた町を訪れた。翌日も引き続き早朝から仕事のため泊る予定だったが、ビジネスホテルもいくつかあるとのこと、何とかなるだろうと予約もせず、夜十時過ぎになって電話をした。ところが、返事は無情であった。

「満員でございます」

「ダイヤルするたびに、どこも同じ返事が返ってきた。心配してくれる土地の人には、鷹揚にかまえ大人（だいじん）ぶった態度をよそおってはいれるもの、折角いただいたお酒の酔いもさめてきた。

年甲斐もなく自分の不用意を棚にあげて、神さま仏さまお願い、とばかりに電話にかじりついた末に漸く「どうぞ」という声にありついた。狭い部屋に固いベッドだったが、不満など云っては勿体ない。とにかく、体を横たえ安らかに眠れるところがあつたのだから。眼をとじながら思ひは我が家に、深夜の帰り還に及んでも、快く迎えてくれる暖かいふとんや、枕があつた。はじめこそ有り難いとは思つたが、もう何十年もそのことを忘れ果てて、当然のこととしていた。

あれこれと思ひをはせているうちにいつか伺つた、死刑囚の辞世が浮かんだ。

「ふとんさま ぞうきんさま さようなら」

自分の身のまわりの小さな草花でさえ、命があり子孫を増やすために努力して、小鳥たちが呼びかけるため、綺麗な花を咲かせていますし、人間にも水をもらい綺麗な花でお返しをします。例え命を持たない物でも人のために、陰ながら奉仕してくれています。

我々は、生きてゆくためには、些細なことにも感謝の気持ちで接することにより、自身に幸せを感じる人間で有りたいものです。